

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	学習開発学講座での教えと学び
Author(s)	野中, 陽一郎
Citation	学習開発学研究 , 13 : 29 - 30
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050803
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



【随想】

学習開発学講座での教えと学び

野中陽一郎¹

時間は、しばらくもとどまることを知らないといえます。過去から現在そして未来へと繋がる時間の流れは、どのように描くことが出来るのでしょうか。人と人との関係性、あるいはあるモノの描き方は、描き手の技術だけでなく「今」という一瞬に到った描き手の状況にも影響を受けると思います。すなわち、記憶や印象、経験は、その後に体験した様々な事象により新たな解釈を生み出し、異なった事象として描かれることになるのではないのでしょうか。広島大学大学院では、2020年度に大規模な組織改編が行われ、そのことに附随し私の学び舎であった講座も既に「旧」学習開発学講座となりました。加えて、本年度は、当該講座を支えてこられた我が師である井上弥先生、樋口聡先生がご退職される節目の年度となります。両先生の研究教育の内容を細部にわたり検討するといったことは、容易な業ではないと考えられます。そこで、本稿は、両先生のご退職を契機とし発刊される学習開発学研究の退職記念号であることに鑑み、学習開発学講座での教えや学びを「今の私」なりに描き感謝の意を示すことを目的にしたいと思います。無論、このことは、感傷にひたるのではなく、経験した教えや学びを振り返り再解釈し描くことで、私自身の未来へと繋がる新たな物語を創出することが出来ると考えています。

私にとって学習開発学講座での教えと学びとは、どのようなものだったのでしょうか。当時の名称に従えば、私は2006年度からの2年間で教育学研究科博士課程前期学習科学専攻、その後2008年からの4年間で教育学研究科博士課程後期学習開発専攻に大学院生として在籍していたことになります。加えて、2014年から1年間で学習開発学講座助教として働かせて頂きました。学習開発学講座との接点は、学習科学専攻入学前の2005年の大学院入試から開始しました。私自身は、学外受験者であったため受験に対する非公式とでもいうべき情報が不足していたように思います。口述試験は、修士論文の口頭試問なさから学習開発学講座に関わる全スタッフが面接官として臨まれていました。このことは、縦の関係があれば心構えや対策をとることが出来たでしょうが、口述試験の部屋に入室早々に驚かされたことを思い出します。しかし、全スタッフが受験者に対応する行為は、今後講座の中で教育育てる学生を様々な視点から捉え検討しようとする真摯な対応に違いありません。すなわち、学習開発学講座に関わる全スタッフが協働して教育を考えていた一つの視座といえるのではないのでしょうか。振り返れば、口述試験という文脈でしたが、この対面コミュニケーションが教えを受ける始まりだったといえます。当時21歳の出来事でした。年度を過ぎ、22歳の私は大学院生として学習開発学講座に入学し籍を置くことになります。

「C病棟にご入院おめでとうございます」といったユーモラスな挨拶がなされ、大学院「入院」早々に学習開発学講座の公式行事がありました。公式・非公式な学習開発学講座の行事は様々ありましたが、学年暦の中に巧みに位置づけられていたように感じます。例えば、大学院入学後には、4月早々に1学年上の修士論文中間発表会が「ポスター発表形式」で実施されていました。この行事は、どの研究室でどのような研究が実施されているのか全体の理解を促すことに有効といえます。また、修士課程1年生にとっては、「鉄は熱いうちに打て」ではないですが、入学後の純粋な気持ちを失わず時期を逃さず鍛えていこうとする取り組みとなります。修士課程2年生の視点で捉えようとすれば、自分に残された有限な時間を意識化させ研究を展開し、場合によっては前段となる春休みを遊び惚けてしまわぬ仕掛けともなります。すなわち、大学院生が自律した学びや計画を創る実践的な教育活動と考えられるのではないのでしょうか。発表会を別観点から捉え意義を見いだすことも可能です。すなわち、スケジュール上の巧みさだけではなく、講座として採用した発表形式にも注目すべきといえます。学習開発学講座では、修士論文発表会自体も中間発表会同様に「ポスター発表形式」で実施されていました。「ポスター発表形式」は、心理学分野では各種学会でも取り入れられ、発表内容に興味のある専門家と密なやり取りや多くの意見交換が出来る利点を有します。一方、文脈を読む必要のある教育学分野では難しい発表形式という捉え方も出来ると思います。この

¹ 高知大学

ことは、既存のパラダイムや慣習に捉われることなく、研究・教育を展開するスタッフの気概や挑戦的な思考を感じられずにいられません。大学院生の立場では見え難いものですが、スタッフが相互の専門性を尊重しつつも学び手にとってより良い教育環境を整える姿勢が根底にあったと助教として現在の立場ではより痛感します。すなわち、博士課程後期の独立専攻に端を発する学習開発学講座は、多様性を活かしつつも学び手の様々な門戸を開く支援をしていたのではないのでしょうか。

学習開発学講座での講義や演習を受講し学んだことは、世間一般で流布される教育に関する言説に振り回されるのではなく、理論に基づき考えること、何をどのように測定したデータであるのかを徹底して考えることの重要性といえます。教育現場は、目に見える習慣だけでなく暗黙の前提、明文化されていない教師や児童生徒の行動規範や隠れた価値観や秩序といったものにより構築されている部分もあると思います。こうしたことに戸惑いや困難さを覚えるのではなく、種々の要因を真摯に捉え多角的かつ徹底して考える姿勢があるからこそ、学習開発学講座で学んだ者は様々なアプローチにより新たな可能性を切り開けるのではないのでしょうか。学習開発講座に関わった大学院生そしてスタッフは大勢いると思います。ただ、私自身は大変幸運なことに大学院生とスタッフの双方の立場を果たすことが出来ました。加えて、大学院生からスタッフに至るまでには、別大学でプロジェクト担当助教として勤務しました。そのため、学び手と共に築いていく講座という組織の中で働いたことは、より一層重要な意味をその後にもたらしてくれました。現在の職場で可愛がられているように思えるのは、学習開発学講座で助教として働いた濃密な1年のお陰であることは間違いありません。今の私は、多くの学習開発学講座のスタッフより教え学んだことより構築されています。しかし何を置いても大学院生時代にとっては主任指導教員、助教時代は組織のトップである講座主任との関係が重要といえるのではないのでしょうか。今の私を描く上では、学習開発学講座全体に感謝を示しつつも相対的に長い時間を過ごし、多様な世界観を構築してくださった当該者のことに触れねばなりません。

それでは、学習開発学講座の出身者の特性と自分自身で記述した多角的かつ徹底して考える姿勢という視点に鑑み、我が師である井上弥先生との関係や見習うべき姿勢を改めて考えてみたいと思います。例えば、幼児児童の教育には、あたたかい愛情を注ぎ接する側面が求められます。しかし、研究的視座に鑑みれば、幼児児童に対して冷静である種合理的ともいえる参与観察を遂行する側面が求められます。すなわち、困難ともいえる文脈においても様々な側面を統合することが必要となります。井上先生は、様々な文脈において自分の立ち位置や見方、目的に応じて実施する事項を巧みに変化させながら、まさに臨機応変な対応を遂行しておられました。学生の普段の生活態度に対しては寛容でしたが、自分自身そして学生の研究指導に対しては大変厳しくも人情の機微に通じておられたといえます。また、研究指導の中でも論文の読み方にはかなり厳格だったのではないのでしょうか。ご自身が納得できるまで学生に問い詰める姿勢は、戦慄さを大学院生時代は覚えました。しかし、教える者と学ぶ者の境界を奪い去り、真に人が学ぶ高等教育の本質を実践されていたように今は感じています。そして、井上先生は心理学研究における慧眼の持ち主でした。現在隆盛を極めるR言語の利便性や追試を含む再現性の問題については、常々指摘されていました。R言語については、計算過程をしかるべきR言語に任せるのではなく、適切な手法であるのかを常に問うておられたように感じます。統計手法だけではなく、様々な頭脳労働をコンピュータに委ねることは、私たちにとって誘惑を伴うものです。しかし、コンピュータに精通しておられるからこそ、誘惑に流されることに踏みどまり、常に真摯に考えることをご自身で行い、学生にも考えることを求めておられました。この種の指導は、単なる知識の蓄積でなく、知識を深め発展させる時間も根拠も要する支援といえます。こうしたことは、固い信念と学び手に対する将来への大きな希望を感じられずにはいられない井上先生の優しさのなせる業といえるのではないのでしょうか。人が過ごした時間の意味は、ある意味主観的なものです。とした場合、井上先生との時間は、かけがえのないものだと思っています。井上先生に指導を受け完成させた論文の姿勢刺激は、ある時点からの1秒刻みを基準としました。しかし、私の認識や世界観を形作った井上先生との1秒1秒は、より豊かな意味を有し、今そして未来を決定づけるものといえると思っています。

本稿を執筆するにあたり、昔を懐かしみ振り返りつつも思考を練り、それぞれの事項を関連づけ、紙面の許す限り今の私から学習開発学講座での教えと学びを捉え描くことを試みました。無論、当時の思考や記憶自体が曖昧な部分も多岐にわたり、当時の知的活動を外化することを目的とし、受講していた各種の講義や演習の発表資料を改めて見直しました。その結果、留意すべき事項や今後の道程を明確化してくださる貴重な資源を提供して下さっていたことを改めて感じました。最近の私は、学習開発学講座と物理的・心理的な距離が離れ、個人的な意味すらない深みのないひとつの今を創り出しつつあったように思います。しかし、私なりに学習開発学講座での教えと学びを描く作業は、過去から未来への橋渡しをする創造的な今の自分を呼び覚まし自己を深く探求する契機となりました。学習開発学講座での教えと学びに甚深い感謝を示します。